「弓削皇子思二紀皇女一御歌四首」の伝来

――一一九番歌・一二一番歌の解釈をめぐって――

駒木　敏

一　はじめに

弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首

吉野川行く瀬の早みしましくも淀むことなくありこせぬかも　（2・一一九）

我妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを　（2・一二〇）

夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな　（2・一二一）

大船の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ痩せぬ人の児故に　（2・一二二）

右は万葉集巻二「相聞」部の「弓削皇子思二紀皇女一御歌四首」と題する歌群である。周知のように、巻二「相聞」の巻頭には「磐姫皇后思二天皇一御作歌四首」（2・八五～八八）が置かれている。同じく四首から構成されていることから、『講義』は弓削皇子の歌群について、「以上四首また一連の作と見えたり」とし、他に巻一の柿本人麻呂の「軽皇子宿二于安騎野一時」の歌の反歌（1・四六～四九）、巻二の磐姫皇后の歌群があるとした上で、これを「起承転結の法」に依拠したものであると指摘した。この指摘以来、二群の関連性はさまざまなレベルで論じられている。確かに、題詞の形式や第二首めに置かれた歌の類似性（磐姫皇后歌群は、第二首めに「かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根し巻きて死なましものを」（2・八六）の歌を置く）など、一見して共通する要素もある。しかし、その内実に踏み込むとき、二つの歌群のあり方は違いを見せてくる。もともと、『講義』の連作説に批判的な見解（窪田『評釈』、『全註釈』など）もある一方、四首がいかなる関連をもって一連を

なすのか（どのような配列の意図が見えるのか）の点になると、磐姫皇后の歌群ほどに緊密な構成をもたず、あるいは配列の統一性に欠けるとする考えは、『講義』を継承する論にも強いのである。

また、四首の構成のあり方に絡んでくることがらとして、歌が弓削皇子本人の手になるものなのか、別人の仮託によるものなのかも、大きな論点である。磐姫皇后歌群についてはほぼ仮託説が定説化しているのに対して、弓削皇子歌群の場合は仮託説、実作説相半ばしている状況といえるであろう。以下に考察しようとする解釈上の問題も、これらのことがらに関わって見過ごせない側面であるように思われる。

二　一一九番歌の解

二―(1)　「序歌」としての形

第一首め（一一九番）は、吉野川の早瀬を景物として恋の思いを述べる。この歌は男性の立場からの歌としては不自然ではないか、という疑いが持たれる。その疑念にこだわりながら、解釈について考えてみたい。歌を再び掲げる。

吉野川行く瀬の早みしましくも淀むことなくありこせぬかも
（2・一一九）

もともと諸注の解釈においても結構揺れの多いものであったが、近年では、第二句までを序詞とする理解が定着している。その場合に、「行く瀬の早み」のミ語法の扱いをめぐって、一つは「瀬が早いので」のように理由、原因とするもの（沢瀉『注釈』）、もう一つは「早み」を名詞と見て、上二句を比喩的な序詞とするもの（『講義』、『古典文学大系』など）の二様の考えがある。「早み」を本来の理由、原因を表わす用法とすると、この句に示された理由・原因に対応する判断は第四・五句の「淀むことなくありこせぬかも」の部分にあることになり、全体はいきおい譬喩歌（以下、表現形式に関する場合はこの語を用いる）として寓喩的に解さざるをえない。けれどもその場合、比喩以前に、急流たることを常とする吉野川に対して「淀むことなくありこせぬかも」と希求する歌になり、論理的には成り立ちえない表現であろう。「早み」を名詞形と見て、第二句までを吉野川の流れの速さ（早瀬）を提示した序詞と見れば、「しましくも」以下は、男女の関係を指示する意と理解することが可能である。少なくとも、譬喩歌と解する場合ほどの不自然さは感じない。この序歌のつなぎ詞は第四句の「淀むことなく」であり、全体の文意としては、〈吉野川の早瀬は（ちょっとの間も）淀むことがない、そのように淀むことなくあってほしいものだ〉の意となる。

ただし、この場合「淀む」の語が比喩として担う意味がどのよう

な内容なのかは、そう単純ではない。多くの注釈書（『全註釈』、『私注』、稲岡『全注』など）は〈二人の仲（我々の関係が）が滞ることのないように〉と口語訳しているが、『講義』に「我等の相見むことも暫くも滞る事なくありてほしきものなり」とし、窪田『評釈』に「わが恋も障ることなくあつてくれぬか」とするのなどは、少し違いを見せている。『新編全集』がここの「淀む」に「男女関係がスムーズに進まないことを表す」と注するように、恋が障害なく進行することを願う意味なのであるが、具体的文脈に置き理解するとき、それぞれに微妙な差異が生じるのである。いずれ比喩表現は、比喩する語と比喩される事柄との間に何ほどかのズレを含むであろうから、上記のパラフレーズに大差はないといってもよい。だが、問題はさらに別の所にある――このことに関係しなくはないが――ように思われる。「二人の仲」にせよ「相見むこと」にせよ、それを当事者の立場から「淀むことなく」あってほしいというのは、あまりにも他人任せの言い方ではなかろうか。そこで、恋のあり方を「淀む」の語をもって表す歌を検討しよう。

二―(2)　「淀む」と歌うこと

まず、万葉集中の動詞ヨドムが川の流れの停滞に関して用いられるのは、次の二例と後掲シの前半（「松浦川七瀬の淀は淀むとも」）などである。

ア　楽波（ささなみ）の志賀【一に云ふ「比良の」】の大わだ淀む（與杼六）
　とも昔の人にまたも逢（あ）はめやも【一に云ふ「逢はむと思へや」】　（1・三一、柿本人麻呂）

イ　落ち激（たぎ）ち流るる水の岩に触（ふ）れ淀める（予杼賣類）淀に月の
　影見ゆ　（9・一七一四、「幸芳野離宮時歌二首」の内）

ただし、アは純粋に流れの停滞のさまをいうのではない。近江荒都歌の第二反歌であり、擬人法を用いているといわれていて、ここは川の流れの淀む（停滞する）ことに「昔の人」を待つ人の（佇む）姿を重ねているのであろう。同じ人麻呂の明日香皇女への挽歌に、

ウ　飛鳥川柵（しがらみ）渡しせかませば流るる水ものどにかあらまし
　【一に云ふ、「水の淀に（与杼尓）かあらまし」】　（2・一九七、柿本人麻呂）

があり、この異伝「淀に」も、流れの淀む状態をいっている。飛鳥川に「しがらみを渡したならば、流れる水もゆったりと行くであろうに」というのは、飛鳥川の速い流れに皇女の早すぎる死を寓した、皇女の死をとどめえなかったことの悔しさの表現（反実仮想）であるから、ここのヨドニは時間の流れの停滞を意味することになる。稲岡『全注』に「よどに」に注して、「水が淀むことであったろう

に、の意。この形は、『のどに』の場合よりも、川に即しすぎて皇女の死を寓するには理に落ちて感ぜられるので、人麻呂は本文のように改めたものと思われる」という通りであろう。

さて残る十余例ほどの大半は、川の流れの淀むことを男女の恋の関係の比喩として用いている。そして、その比喩の内容を見てみると、男の訪れが途絶えがちになる意と相手への思いがたゆむ（薄れる）意との、二つの場合にほぼ収まる。Ⅰ、Ⅱに分けて例示しよう。

Ⅰ　男の訪れが途絶えることをいうヨドム

エ　絶えず行く飛鳥の川の淀めらば故しあるごと人の見まくに
（7・一三七九、譬喩歌）

オ　言速くは中は淀ませ水無し川絶ゆといふことをありこすな
ゆめ
（11・二七一二、寄物陳思）

カ　梓弓末の中頃淀めりし君には逢ひぬ嘆きは止まむ
（12・二九八八、寄物陳思）

キ　湊入りの葦分け小舟障り多み今来む我を淀むと思ふな
【或本の歌に曰く「湊入りに葦分け小舟障り多み君に逢はずて年そ経にける」】
（12・二九九八、寄物陳思）

ク　洗ひ衣取替川の川淀の淀まむ心思ひかねつも
（12・三〇一九、寄物陳思）

ケ　ねもころに思ふ我妹を人言の繁きによりて淀む頃かも
（12・三一〇九、問答）

コ　初花の散るべきものを人言の繁きによりて淀む頃かも
（4・六三〇、佐伯赤麻呂）

サ　夏葛の絶えぬ使の淀めれば事しもあるごと思ひつるかも
（4・六四九、坂上郎女）

Ⅱ　相手への思いが薄れることをいうヨドム

シ　松浦川七瀬の淀は淀むとも我は淀まず（与騰麻受）君をし
待たむ
（5・八六〇）

ス　玉藻刈る井堤の柵薄みかも恋の淀める（余杼女留）我が心
かも
（11・二七二一、寄物陳思）

右のⅠの群には、ヨドムの語を比喩的文脈に用いたもの（エ・カ・キ・ク）と単独で用いたもの（ケ、コ・サ）とがあるが、比喩的表現（序歌的なものが多い）の多いことに注目される。「水無し川―絶ゆ」の比喩と響き合って「中は淀ませ」と表現されるオは、中間的なものといえる。そして、ⅡよりもⅠのタイプが圧倒的に優位であることは、ヨドムの語が川の流れの淀むことを恋愛関係の比喩として用いた即物的表現であることを物語っている。しかし、掲げた歌のなかにはその意味の曖昧なもの、解釈が微妙に異なるものもあるから、その幾首かについて確認をしておこう。

まずヨドムが意味する内容であるが、結論的にいえば、男の訪れ

（通うこと）の途絶える、間遠になることがヨドムであるといってよい。歌い手、もしくは歌いかけられた相手の性別が明らかな事例によって見てみよう。カは「淀めりし君には逢ひぬ」とあり、詠み手は女性である。〈このところ訪れのなかったあなたにお逢いできました。もうため息をつくことはないでしょう〉と思いを吐露する歌で、ヨドムは男の訪れの状態をいう。サは坂上郎女の歌で、

相見ずて日長くなりぬこの頃はいかに幸くやいふかし我妹

（4・六四八、大伴駿河麻呂）

への返歌である。左注に「右、坂上郎女は佐保大納言卿（安麻呂を指す）の女なり。駿河麻呂は高市大卿（大伴御行を指す）の孫なり。両卿は兄弟の家、女孫は姑姪の族なり。ここを以て、歌を題りて送答し、起居を相問す」とあるように、叔母と甥の関係にある二人による起居相聞ではあるが、ヨドムは男＝駿河麻呂の使者の途絶えることをいっている。

これらに対して、ケ・コは男性の歌で、共通して「人言の繁きによりてヨドムころかも」という。男性側が人言を気にして恋人のもとに通うのを自制している歌である。

このように見ると、ヨドムは基本的に相手の男性（その使者）の訪れが途絶えることを意味していることになる。そこで、語彙の上では性別を示すことのないオ・クについても、オは〈噂が激しいのなら、今は訪れが途切れても構わない（けれども、途絶えることはないようにしてね）〉と相手を気遣う女の歌で、クは〈淀む――通うのを疎かにする――ような気持ちは持っていません〉という男の意思を表明した歌と読むことができる（ただクについては、『古典集成』が女の立場の歌とし、『釈注』が男女どちらの立場でも可能とするなど、なお問題を残している）。

同じようにキも〈障害が多いのでやっと今（これから）逢いに通っていける私を、訪ねて来ないなどと思わないでほしい〉と弁明する男の歌と理解できる。ただし、そうすると、異伝の「君に逢はずて年そ経にける」は女性の側からの発想であるから、本文歌と主体（詠み手）の立場が異なることになる。これについては、小野『全注』が「本歌と上三句が同一であるだけで、別の歌である。本歌は男の歌、或本の歌は女の歌」と断じている通りである。おそらくは、問答歌か類似歌として並んでいたものの片方が異伝と見誤られたような事情が考えられてよいであろう。

エの歌のみは詠み手が確定できない。「絶えず行く飛鳥の川の淀めらば」の序詞の部分は、男の訪れの途絶えをいうとして、「故しもあるごと人の見まくに」（何か訳があるのかと人が見咎めるであろうに）と第三者を気にする者は、男でも女でもありうるからである。類歌関係にある坂上郎女のサの場合は、その主体は郎女（女

性）であるが、それを本歌に及ぼしてよいかどうかは分からない。

以上、ヨドムがⅠの意味で用いられる場合は、ヨドムの主体は男であること、恋愛の障害に関して用いられる傾向のあることが確認されよう。

次に、Ⅱの〈思いがたゆむ〉意を表す二例について確かめよう。シは巻五の「遊二松浦河一序」を持つ歌群中の「娘等の更に報ふる歌」の一つで、「七瀬の淀」と対比して「我は淀まず」と歌う。川の淀瀬を景物として恋の思いを述べる即物的表現はⅠの幾つかの例に等しいが、この場合は歌い手は女性（の立場）であるから、〈私は思慕する気持をゆるめずにあなたをお待ちします〉と、自分の意思の強さをいっていることになる。次のスは、「井堤のしがらみ」（＝恋の障害）が少ないので恋心もさめてきたという。「恋の淀める」の表現によって、ヨドムのは相手に対する恋慕の念であることがはっきりしている。歌はそういう自身の心の動きを深く内省している。詠み手は男女のいずれであってもおかしくない。どのような状況でのものなのか、「このような醒めた心境は相聞歌として大変珍しい」（『釈注』）といわれる通りであろう。

こうして、Ⅱのヨドムは詠み手の側から相手への思いが薄れること（一途でなくなること）をいっている。ヨドムことを歌う相聞歌の中でその主語が「相手への思い」となる確実な例は、この二つである。

二―(3)　助動詞「コス」の希求表現

さて当該のヨドムは、男性の側から、吉野川の流れを比喩として、「淀むことなくありこせぬかも」と願っている。ヨドムが相手のもとに通う意の場合は主語が男性になるから、弓削皇子を歌い手とする今の場合はその類型には当たらない。かといって、このヨドムの主語が「二人の関係」であるとすると、〈我々の関係が淀むことなく続いてほしい〉というほどの意となり、他人任せの傍観的表現となってしまう。もともと、助動詞「コス」は、『時代別国語大辞典上代編』に「～してくれと、相手に希望する意」とするように、話し手が相手や対象にむかって希求する意味の語である。

ソ　梅の花今咲けるごと散り過ぎず我が家（へ）の園（その）にありこせ（許世）ぬかも　（5・八一六、筑前守山上大夫）

タ　梅の花夢（いめ）に語らくみやびたる花と我（あれ）思（も）ふ酒に浮かべこそ　（5・八五二、後追二和梅歌一）

ソでは、歌い手が梅の花に対して〈散らずに園に在り続けて欲しい〉と希求し、タでは、夢に現れた梅の花が夢を見た歌い手に対して〈私は風流を自認している花だから、どうか酒に浮かべて欲しい〉と希求しているのである。「コセ」（「アリコセ」）によって希求

されるものは、咲く花がそのまま散らずにあること（5・八一六）、夜の長さがそのまま続くこと（4・五四六、歌の掲出は省略）、そして相手の命の存続すること（六・一〇二四、同上）など、いずれも話し手の関与しない現象・状態などである。恋する男女の関係についていう例が先掲オであるが、これも女性が男性に希求する形である。話し手の意志が及ばない事象であるからこそ、願望表現が成り立つのである。したがって、自分を含む二人のあり方（関係）に対して用いるのは異例といわねばならない。

このようにして当該歌の場合、ヨドムの主語は「二人の関係」でなく「あなたの（私への）思い」として理解するのがもっとも自然である。今はそのように理解しておきたいと思うが、ヨドムを相手の思いが薄れる意で用いる例も実はないのである。先述の『講義』のような解があるのもそのためであろう。このような解は、すでに契沖『代匠記（精撰本）』に「我ガ人をヲ思フ心モ彼早瀬ニ劣ラヌヲ、ナト逢フコトノヨトミカチナルラム。アハレ彼水ノ流レツクヤウニ、逢見ルコトモ継テ有ハヤトナリ」（傍線引用者）とあるところで、前半の傍線部のような意味を補うのは、ヨドムの原義を意識しているからである。さらに『全釈』に、「芳野川ノ流レル瀬ガ早イノデ、少シノ間モ淀ムコトノナイヤウニ、私モアナタヲ暫時モ絶エズニ、通ツテ逢ヒタイモノデスヨ」（傍線原文）としたのも、ヨドムの義をⅠのケースと考えたのであるが、そこまで徹底すると、男の立場からの歌という、この歌自体の表現のあり方が成り立たなくなってしまう。

以上に見てきたことからすると、おそらくこの歌はもともと相手の絶え間なき訪れを切望する女性の立場からの表現類型に属するものを、男性の立場から詠み変えたものとするのが自然な理解であるように思われる。そして、四首の連作の中では、述べきたったように、〈あなたの思いが障害に妨げられて薄れることのないように〉というくらいの意味をもって構成の一端を担っていると考えられるのである。

三　一二一番歌の解

三―(1)　「玉藻刈る」と歌うこと

もう一首、歌群の第三首（一二一番）もその表現のあり方（比喩の内実）に問題があるように思われ、その問題に思いをめぐらすとき、冒頭に触れた歌群の伝来（来歴）の一面が透けて見えるように思われる。これも、もう一度歌を掲げよう。

夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな
（巻一・一二一）

この歌は一見して分かるように、都人が物珍しい海浜の景を詠ん

だ内容である。「住吉の浅香（鹿）の浦」は、住吉区浅香町及び堺市浅香山町付近とされ、巻十一の寄物陳思歌には、

行きて見て来れば恋しき浅香潟山越しに置きて寝ねかてぬかも

（11・二六九八）

と歌われ、いとしい思い人の比喩に置き換えられるような心引かれる景として記憶されていたことが分かる。そのような羈旅歌の発想になる歌が「紀皇女を思ふ」歌群にあるのは、そこに何がしか恋のあり方が託されているからである。歌意については、すでに契沖が「此歌ハ譬喩ナリ。夕塩ノ満来レハ、玉モノ刈ラレサルコトク、程過ナハ障出来テ、逢カタキ事モ有ヌヘシ。塩干ノ程ニ玉藻刈ヤウニ、早逢ハヤトナリ」（『代匠記　精撰本』）と述べたことに尽くされている。海藻を刈ることに恋のあり方を寓喩した譬喩歌として理解され、特にそれで問題はない。その際に、皇子の作か仮託の作かが問題にもなるのであるが、以下に考察するように、表現のあり方からして、おそらく本人の作ではありえないであろう。つまり、本歌は旅の歌の類型表現を恋の比喩として転じ、再解釈したものと考えるのがよさそうなのである。以上のことを整理した上で、表現に即してその特異な点を考察していこう。

まず、「玉藻（海藻）」を「刈る」ことが〈女性と契る〉ことの比喩となる点についてである。相聞歌では、植物を刈る（折る）ことがしばしば女性と契る、約束することの比喩として現れる。しかし、玉藻の場合に関しては、そのような例はほとんど見ることができない。

一方、玉藻（を刈ること）と恋愛、もしくは女性のイメージとの結びつきについて確認すれば、玉藻を刈るのは多く「海人娘子」の仕事であることや、玉藻が共寝の姿態の比喩として用いられることなど（多田一臣「なびく」古代語誌刊行会編『古代語誌　古代語を詠むⅡ』、一九八九年、桜楓社）、玉藻は一面で女性のイメージと結びつきやすい。にもかかわらず、譬喩歌や寄物陳思歌など、物に寄せる表現において海藻を女性の比喩とするのは、巻七「譬喩歌」の「寄レ藻」の歌群ぐらいであろう。

チ　潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き

（7・一三九四）

ツ　沖つ波寄する荒磯の名告り藻は心のうちに疾となれり

（7・一三九五）

テ　紫の名高の浦の名告り藻の磯に靡かむ時待つ我を

（7・一三九六）

ト　荒磯越す波は恐ししかすがに海の玉藻の憎くはあらずて

（7・一三九七）

ツの「名告り藻」は女性の比喩ではなく、「相手が口止めした言

葉」の意（『新編全集』）とも解されるが、他の三首は海藻を女性の比喩としている。しかしながら、「玉藻刈る」ことを女性と契ることの比喩とした確かな事例となると見当たらない。当該歌の場合、何か特殊な脈絡があって、玉藻を刈ることが女性と契ることの比喩となったということもありえよう。例えば、同じ浅香を詠んだ前掲の「行きて見て来れば恋ひき浅香潟」（11・二六九八）の「浅香」（原文「朝香」）の語について、早くからいわれているような〈妻問いから帰って来た朝〉との連想（『略解』に「初二句は往て妹を見て、帰来れば恋しきと言ふにて、朝の序のみ也」とある）などが想起されるけれども、当該歌の場合にはそのイメージにも結びつきにくい。

いったいに、玉藻を刈ることを歌うのは羈旅歌に多く、その内容は新鮮な旅先の光景としての海人の行為であったり、旅人自らの物珍しさや家苞を求めるための行為であったりする。

ナ　釧つく答志の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ
（1・四一、柿本人麻呂）

ニ　名寸隅の　船瀬ゆ見ゆる　淡路島　松帆の浦に　朝凪に
玉藻刈りつつ　夕凪に　藻塩焼きつつ　海人娘子　在りとは聞けど〜
（6・九三五、笠金村）

ナは、伊勢の地に行幸した大宮人たちが今頃は答志島あたりで玉藻を刈りつつ楽しんでいるのであろうかと、都の留守を守る官人が思いやる歌、ニは、神亀三年（七二六）の「播磨国、印南野に幸す」時の歌で、松帆の浦に玉藻を刈り、藻塩焼く海人娘子たちを実地に見たいと願う歌である。そのようななかでも、当該歌とよく似た構成をもつのは、すでに諸注の指摘する次の二首である。

ヌ　時つ風吹くべくなりぬ香椎潟潮干の浦に玉藻刈りてな
（巻六・九五八、小野老）

ネ　時つ風吹かまく知らに阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りてな
（巻七・一一五七、摂津作）

いずれも「時つ風」（定まった時分に吹く風）が吹いてこないうちに玉藻を刈ろうと歌う。ヌは、天平五年（七三三）冬十一月に大宰府の官人たちが香椎廟を参拝した折のもの、ネは羈旅の作であるから、共通して旅人が家苞として海草を刈ることをいっていると思われる。

当該歌は、歌の趣旨や文の構成において右の二首にほとんど等しい。急いで玉藻を刈ることの理由に右の二首が「時つ風の吹くこと」をあげるのに対し、当該歌が「潮の満ちること」をあげるのが異なるのみである。こうして、当該歌は海浜の景に向き合うところでものされた羈旅歌の類型に属することが明らかとなろう。

三―(2)　「～テナ」の勧誘表現

次に注目したいのは、これらの歌における終助詞「ナ」が、話し手から集団員（仲間）に向かって発想される文脈のなかで勧誘の意を担う点である。『時代別国語大辞典　上代編』に「自己（あるいは自分たち）の行動の実現を希望し、あるいはその意志をもつ」といい、『新編全集』には「ナは話し手一人だけの意志にも聞き手に向っての勧誘にも用いる終助詞」（8・一六四六条）とする。ことに当該歌やヌ・ネは、対詠的文脈のなかで、「～テナ」の勧誘的用法によっていると考えられる。ヌの歌に即してみると、その題詞には「大宰の官人等、香椎の廟を拝み奉り、訖はりて退り帰る時に、馬を香椎の浦に駐めて、各懐を述べて作る歌」とあって、冒頭に長官大伴旅人の

いざ子ども香椎の潟に白たへの袖さへ濡れて朝菜摘みてむ

（6・九五七、帥大伴卿）

がある。小野老のヌはそれに応じたものである。旅人歌が〈朝菜を摘もうではないか〉（「イザ……テム」）と呼びかけたのに対して、老歌が〈玉藻を刈ってしまいましょうよ〉（「（イザ）……テナ」）と応じて、二つは勧誘的文型により呼応しているのであり、集団を背景にする問答である。ネも巻七の「摂津にて作る」の小題に括られた羈旅歌であるから、「玉藻刈りてな」の表現は、個人の願望というより歌い手が旅をする仲間に向かって誘いかけたものと理解するのが自然である。

そして当該歌も、夕刻になると潮が満ちてくるだろうから（「夕さらば潮満ち来なむ」）、それまでに玉藻を刈り取ってしまおうよ（「玉藻刈りてな」）というのであって、類型の二首とほぼ趣旨は同じであり、歌い手が旅を共にする仲間に呼びかけた趣きの表現と見るのが穏当ではなかろうか。

そのことを確かめるために、終助詞「ナ」が完了のツと接合して「～テナ」という形をとる例をあげてみたい（右のヌ、ネは除く）。

ノ　君が代も我が代も知るや岩代の岡の草根をいざ結びてな

（1・一〇、中皇命）

ハ　梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり

（5・八二〇、筑後守葛井大夫）

ヒ　白たへの君が下紐我さへに今日結びてな逢はむ日のため

（12・三一八一、悲別歌）

＊フ　妹が門いや遠そきぬ筑波山隠れぬほとに袖は振りてな

（14・三三八九、常陸国東歌）

＊ヘ　妹に逢はず久しくなりぬ饒石川清き瀬ごとに水占延へてな

（17・四〇二八、大伴家持）

＊ホ　渡る日のかげに競ひて尋ねてな清きその道またも会はむた

め　（20・四四六八、大伴家持）

ノ～ヒは明らかに勧誘の意味である。ノについては、場を同じくする「我が背子は仮庵作らす草なくは小松が下の草を刈らさね」（一一）が誂えの「ネ」をもって対詠的に歌われていることも傍証となる。ハは梅花の宴という集団的な場でのものである。「思ふどち」（心の通いあう仲間）へ向かって発せられる対詠性が、「かざしにしてな」の語勢であろう。ヒは、「君が下紐」を結ぶという行為に関しているため、一見勧誘ではないように見えるが、「我さへに」（吾サヘ手ヲ添ヘテ―井上『新考』）とあるから勧誘と理解することができる。残るフ～ホ（＊印）は歌い手の願望の表現と見るほかはないが（フ、ヘには集団を背負った表現の場が想定されなくもない）、前掲ヌ・ネを含めて、「～テナ」の事例の過半が勧誘の意味を明確にしている傾向は、当該の歌の解釈にとっても見過ごしえないことである。

ちなみに、「ナ」の単独形でも勧誘的な用法は存在する。

マ　熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな　（1・八、額田王）

ミ　梅の花咲きたる園の青柳を蘰にしつつ遊び暮らさな　（5・八二五、土氏百村）

ム　秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ見に行かな萩の花見に　（10・二一〇三）

＊他に、17・三九五四、17・三九七三、9・一六八七など

マは集団に向かいこれを統率するごとき意志を担い、ミは梅花の宴の場の雰囲気を体しながらその気持ちを代弁し、ムは感動詞「イザ」と共起して、集団員に呼びかけるような形で、それぞれ「ナ」の勧誘としての意味が表出されている。

こうして、集団的な場で、あるいは仲間に向かってともにある行動をしようとする意志を表出する場合、終助詞「ナ」はそれを担っていた。とりわけ、助動詞「ツ」と結びつく「～テナ」の語法はその傾向が顕著であることが確かめられる。

本来当該歌は、行幸・羈旅などの旅先でいわば旅の「しるし」として玉藻を刈ることを歌う表現の類型として位置づけられる。当初から、譬喩歌の方法を意識した相聞歌として発想されたのであるならば、例え羈旅歌をモデルにしたにしても、おそらくこのような表現を採ることはなかったであろう。問題は、見てきたようなこの歌の相聞歌としての寓意が、多少の表現の不自然さをもちながらも理解されるのは、当該歌がこの四首一連の文脈に置かれて初めて可能なのだということである。本歌について稲岡『全注』は、佐々木『評釈』・窪田『評釈』に、元来は「行楽の歌」と見られるとしたのを受けて、「四首を現在見るように配列したのが編者によるとすれ

ば、もともとは旅の歌であったことも考えられよう」としている。小稿の考察によれば、この点はむしろ積極的に認められるべきであり、当該歌は、羈旅歌の類型から比喩の恋歌への転換という、一種の読み替えのなかで成り立つ事実の上に立って、解釈されるべきである。また、既存の類型歌を異なった文脈（場）に置き替えることにより、羈旅歌が比喩的な相聞歌として再生されることがありえたとするならば、本歌のケースは譬喩歌の生成、あるいは方法的自覚という点でも興味深い問題を投げかけている。

おわりに

以上、弓削皇子歌群中の二つを取りあげて、現に相聞歌として編集されているあり方と一方に歌の表現が持っている重層性（素性・来歴の反映）とのギャップについて問うてきた。

第一首め（一一九番）について、男の立場の相聞歌としては不自然な表現を含み、したがって皇子の実作ではありえないことを考察した。また、第三首め（一二一番）については、本来的には行幸・羈旅などの集団的な場において発想された旅の歌の類型と見ざるをえないことを指摘した。むろんどちらも歌群のなかでは、弓削皇子（男）が紀皇女（女）を思う「連作」の一部を担うように配列されている。四首は、沢瀉『注釈』がすべて比喩の方法をとると指摘したように、第三首めは譬喩歌で、あとの三首は寄物陳思歌である。つまり一連は、それぞれ「川」・「秋萩」・「玉藻」・「湊」に寄せる恋の体裁をとっていて、その並びにより〈思い〉のあり方を多面的に示した歌群と把握される。けれども、その幾つかの歌が表現としては覆うべくもない不自然さをもつこともまた否めない。

このような事実から導き出せるもっとも無理のない判断は、少なくとも上記の二首については、既存の歌を弓削皇子のものとして読み替える（もしくは改める）ことにより、「連作」中に位置づけた歌という方向で考えることであろうと思われる。

〈付記〉

＊『万葉集』の原文は新編古典文学全集（小学館）に拠るが、私に表記を改めた部分もある。

＊小稿の論点は、別に発表予定の拙論「構成的歌群のなかの恋」（高岡市万葉歴史館論集11『恋の万葉集』、笠間書院、二〇〇八年三月刊行予定）に関説し、別稿で詳述できなかった部分に関するノートであることを、お断りしたい。